



## 登場人物

---

市村直樹・・・浮気者

元木千早・・・直樹の恋人・同棲中

芹口隆康・・・私服警察官・笑顔がトレードマーク

武藤玲子・・・うつ病を患う自称ストーカー被害者

斉藤あきら・・・暴力団組員

三橋潔・・・暴力団組員・あきらの子分

## 再会

---

### ○暗

真っ暗な画面に白文字が浮かぶ

「元木さん？」

「・・・え？」

### ○渋谷の全景（夕方）

——渋谷の喧騒——

市村N(ナレーション)「初恋は実らないというけど」

### ○同・スクランブル交差点（夕方）

横断する人ごみの中で、振り向き姿で止まっている元木と声をかけた姿勢の市村。

\*映像処理ではなく、二人の役者が意図的にストップモーションしている。

お洒落で清楚なキャリアウーマン風の元木。徐々に顔へと視点がよっていく。

市村N「初恋は永遠に心にいき続けるもので—」

### ○写真（回想）

暴走族時代の元木の写真。その端に小さく写る暴走族時代の市村。

市村N「俺が一番やんちゃだった頃、彼女は、俺ほどじゃないけど、結構ヤバイ人の恋人だった」

強面の男性と寄り添って写る元木と強面男性に愛想笑い浮べている市村。

市村N「正直、彼女が俺に気があることは気づいていたけどマブダチの彼女という事もあり俺は気づいていな

い振りをしていた」

元木に髪を掴まれビビル市村とガン垂れている

元木。（回想終わり）

### ○元の渋谷のスクランブル交差点（夕方）

市村N「そんな俺達が町で偶然の再会を果たした」

元木のアップ。キラキラと輝いている。

### ○写真

二人の思い出の写真が流れる。

市村N「どちらからとも無く連絡先を交換し」

携帯片手に必死な市村と明らかに拒否している元木。

市村N「ごく自然な流れで会うようになり」

電柱の影に隠れている市村。

遠くのビルの入り口から退社してくる元木。

市村N「ごく自然な流れで結ばれた」

ラブホテルの前で元木に土下座している市村。

○二人の住むアパート・外観（夜）

二階建て木造のアパート。

市村N「そして俺達は、ごく自然に永遠の愛を誓ったんだ」

## 不義理な男

---

○同アパート・トイレ・中（夜）

携帯画面に表示される文字。

メール送信者：美奈子

文面「昨日は超楽しかったよ！もお、いっちって超えっち！また彼女に内緒で遊びにいっちゃっていいかな」

携帯をみつめてニヤニヤしている市村直樹

ノック音

無視して携帯をいじる市村。

ノック音。

意に介さず携帯をいじる直樹。

ノック音。

市村「（舌打ち）ちょっと待って、今でるから」

ノック音。返信ボタンを押す市村。

市村「よし。（水洗のノブを捻り水を出す） はいはいはい。そう何度もノックしなくても出るか」

ドアを開けた瞬間、右ストレートが市村の顔面に直撃！後ろに横転する市村。

ドアの前で拳を突き出したまま非常に冷めた表情で立っている千早。

千早「（市村を見下ろしている）・・・」

血が滴っている鼻を押さえている市村。

市村「へ・・・へ？」

左手に持ったブラジャーを掲げる千早

千早「なんやコレ？」

市村「ぶ・・・ぶらじゃああ？」

また市村の顔面にパンチを入れる千早。

千早「知っとるわ、何可愛く言うとなねん。これ誰のか聞いとんねん」

市村「さあ、ち、ちーちゃん（千早）のじゃないの？」

市村の顔面を殴打しだす千早。

千早「（淡々と殴打しながら）なんで、Bカップの私がIカップのブラジャー持ってんねん、あてつけか？」

コラ、コラ、コラ、コラ——」

部屋中に響く鈍い音と「ぐえ、ぐふ」という悲壮な声

市村「思い出しました——」

ピタっと手を止める千早。

非情な面持ちで市村を見下す千早。

原型を留めて程腫れ上がった市村の顔。

市村「そ、それ僕のです」

ゆっくりと手を掲げる千早

市村「お、おお、俺、実は女装趣味があるんだよ！」

千早「・・・へえ～」

不敵な笑みを浮かべている。

## 警察と被害者

---

### ○道路（夜）

駐車場つきコンビニから50メートルほど離れた薄暗い道路に止まる一台の車。

### ○車・中（夜）

フロントガラス越しに見える煌々と光るコンビニ。

ジッと前を見ている千早。

千早「・・・早よタバコかってこいよ」

千早越しに女装姿の市村の姿。

市村「まじい？」

千早「なんか不味いことでもあんのか？」

市村「・・・いってきます」

重い足取りでコンビニへと向う市村の後ろ姿。

### ○コンビニ・外・駐車場（夜）

人目を気にしながらコンビニへと入っていく市村  
暗がりに浮かぶ芹口隆康・武藤玲子の人影。

---時間経過---

タバコを片手にコンビニから出てくる市村。

市村「（ボソッと）余計な事いうんじゃないなあ」

市村の左側にスッと並んで歩く作り笑顔の芹口。

芹口の顔は常に笑顔を絶やさず笑顔以外の表情を持ち合わせていないようにさえ感じさせられる。

市村「・・・」

並んで歩く市村と芹口

市村「・・・」

市村の腕を組み左へ進路変更してあるく芹口

市村「え？ちょ、ちょっと」

笑顔の芹沢は有無を言わず市村を暗がりへと引き連れていく。

薄暗い壁そって俯きかげんに佇む玲子。

玲子「（顔は見えない）・・・」

市村を連れてくる芹口。

市村「ちょっとなんですか一体？」

芹口「（玲子に）この人？」

市村「は？」

ゆっくりと顔を上げる玲子。目の下に巨大なクマ  
のある顔が現れる。

市村「ひっ！」

玲子「はい。間違いありません。この人です」

芹口「あっそ、君いだめだよ全くうもう」

市村「・・・はい？」

芹口「まあ取り敢えず詳しいことは署で聞くから—」

市村「ちょっと待ってください。どなたですか一体！」

芹口「あ、私？私ね（警察手帳を見せ）こういう者」

市村「け、警察？」

芹口「うん。そうそう、でね、（玲子を指し）この人が  
ストーカー被害を訴えてきててね。張り込んでたわけ  
よ。そしたら案の定キミがあわられて—」

市村「案の定って僕ストーカーなんてしてないっすよ」

芹口「だって（玲子に）ねえ？」

玲子「はい。私をいつも、つけ回す女装した変態やろう  
はあなたです」

市村「いやいや、僕はたまたま女装してただけです！」

芹口「たまたまって、たまたまどうやって女装する事あ  
るのよお、もう言い訳苦しい苦しい。はは」

市村「で、でも、あ、そうだ。連れがいるんです！」

芹口「どこに？」

市村「（千早が乗る車の方角を指し）あそこです！」

停車しているはずの車は忽然と姿を消している

市村「・・・」

芹口「いないじゃない」

市村「と、とにかく僕は関係ないですよ！」

芹口「うんうん、皆そういうのね。取り敢えず現行犯っ  
てことでね（手錠を出す）はい手だして」

市村「いやですよ、現行犯じゃないでしょ」

芹口「まあまあそう言わず（手をとろうとする）」

市村「（よける）いやです」

芹口「いいからいいから（手を取ろうとする）」

市村「（よける）良くないですって」

グダグダとやり取りを続ける二人。

玲子「・・・」

ギュっと拳を握る玲子。



## 恐怖の幕開け

---

グダグダグダグダグダグダとした遣り取りが延々に続いている。

芹口「もう、参っちゃうな（玲子に）ねえ。ー！」

玲子の左ストレートが芹口の顔面に食い込み、

スローモーションで後ろに飛んでいく芹口。

スローで驚いている市村。

大の字に倒れ気を失う芹口。

気絶しているにも関わらず笑顔を絶やさない芹沢。

鼻の穴からはドクドクと血が溢れ出ている。

何が起きたか理解できず唯放心状態に陥る市村。

上に馬乗りになり芹口の顔面を殴打しだす玲子。

玲子「グダグダ、グダグダ、なにやってんのよ、さっき

から！やる気あんの！アンタ達警察がそんなんだから私みたいな、か弱い女性が怖い思いする  
んでしょ！

反省しない、反省しない、反省反省反省反省ー」

芹口を殴打しまくる玲子の後ろ姿。

まるで邪悪な鬼が人間の肉を貪っているようにさえ見える。

市村「（震えている）・・・」

尻餅をつき、おしっこを漏らす市村。

やがて、ゆっくりと立ち上がる玲子。

両手から血が不気味に滴り落ちる。

市村「（震えている）に、逃げなきゃ・・・」

ゆっくりと振り返る玲子。

必死で後ずさりをする市村。

だが腰が抜け思うように体が動かない。

市村「（消え入りそうな声）たす、助けて」

ふうーふうーと呼吸をしながら、徐々に市村へ近づく玲子。

市村「いやだ・・・死にたくない・・・」

なんとか体を動かし、四つんばになって逃げ出す市村。

ぴくっと反応し、徐々に速度を速める玲子

市村「（必死）いやだ、いやだ、いやだ」

四ツんばで逃げている市村。その背後で両手を広げた玲子の姿が徐々に大きくなる。

玲子「（呼吸音）ふうーふうー」

市村「いやあああー」

玲子の声「何見てるのよ！」

その声に思わず、その場でうずくまる市村。

市村「ごめんなさいーい！」

玲子の声「なんとか、いいなさいよ！」

市村「ごめんなさい、ごめんなさい。殺さないで！」

玲子の声「人の事じろじろ見てんじゃないわよ！」

市村「はい、すみませ・・・え？」

恐る恐る振り返る市村。

電柱を睨みつけている玲子。

市村「・・・」

玲子「（電柱に）なによ？え？そんな訳ないじゃない！」

市村「・・・」

ゆっくり後ずさりし、やがてダッシュで逃げ出す市村。

助けてくれたのは・・・

---

○長い下りの道路（夜）

よたついた足取りで息を切らせながら麓で立ち止まる市川。

市川「（息を切らせ）こ、ここまでくれば（振り返る）」

坂の頂上に徐々に人影がみえてくる

市川「う・・・うそ・・・うそだろ」

アスリートさながらのストロークで走りよってくる玲子。

市村「う、うおおお（逃げ出す）」

ひと気のない交差点付近の道路。そこに一台の車が停車している。車からサングラスを掛け、

黒のスーツに身に包んだ渋め男性・斉藤あきらが出てくる。

おもむろにタバコに火をつける斉藤。

天に向かって煙を吐く斉藤。

斉藤「・・・」

交差点の左側から市村がよろめきながら飛び出してくる。

斉藤「・・・」

市村「（斉藤を見て）あ、ああ、（胸元まで近づき）助けてください追われるんです。助けてください」

斉藤「・・・」

アスリートさながらの長いストロークで走りながら斉藤の車の横を通過していく玲子。

○斉藤の車・中（夜）

運転席に座っている斉藤。

斉藤「もういいぞ」

斉藤の股間からゆっくり顔をあげる市村。

市村「ありがとうございます、助かりました」

斉藤「（市村の顔を見つめている）・・・」

市村「（斉藤の手を握り）本当に本当に有難うございます」

斉藤「（市村の顔を見つめている）・・・」

涙交じりに笑顔を見せる市村の顔が次第にキラキラと輝いて見えてくる。

斉藤「・・・まだ、危ないぞ」

市村「え？」

斉藤「ちょっと落ち着ける所で暫く隠れたほうがいいだろう（車を出す）」

市村「あ、・・・はい」

## 愛って不快（深い）

---

○ラブホテル・外観（夜）

○同・一室（夜）

ベッドに座っている市村。

斉藤「（コーヒーを持ってくる）飲みな」

市村「（受け取り）ありがとうございます」

市村の横に座る斉藤。

斉藤「いったい何があったんだ」

市村「それが・・・（手がガタガタと震えだす）」

斉藤「（抱きしめる）いいよ、もう心配すんな」

市村「（ボロボロと涙を流す）は、はい」

斉藤「怖かったんだな」

市村「（泣いている）はい・・・はい、怖かったです」

市村の顔をそっと持ち上げ、涙を拭う斉藤。

斉藤「ほら、もう泣くんじゃねえよ」

市村「はい・・・すみません」

そのまま市村にキスをする斉藤。

市村「・・・え？」

ベッドへと倒れこむ二人

斉藤「何も心配せず俺に委ねろ。な？」

市村「え、あの、ちょ、ちょっと俺、男ですよ？」

斉藤「いいから目を瞑ってろ。な？」

ゆっくり市村の服を脱がせていく斉藤

市村「いや、ちょ、ちょっと待って無理！無理！」

抵抗する市村の両手を押さえつける斉藤。

斉藤「（鼻息荒く）いいから黙ってろ！」

市村「だ、誰か助けてー」

ガチャとドアが開きスーツ姿の男性が入ってくる。

ベッドの上で揉み合っている市村と斉藤。

斉藤「（興奮気味に）おい、ここまで来てそりゃないだろう？お前だって本当はわかってたんだろう？ん？」

市村「わかるわけないでしょう！男ですって俺は！」

三橋の声「兄貴！」

斉藤「！（振り返る）・・・潔」

ドアの前で、寂しげに佇む三橋潔

三橋「（声を震わせ）ひどいなあ兄貴・・・俺のこと置いて、こんなトコ来てんるんだもん」

斉藤「き、潔。どうして此処にいるのが判ったんだ？」

携帯を見せる潔

三橋「へへ、兄貴の携帯に内緒でGPS機能付けてたんだ。これで兄貴がいなくなっても探せるようにさ」

斉藤「そうか・・・潔聞いてくれー」

三橋「（遮り）誰だよ、そいつ」

斉藤「こいつは・・・知らない奴だ」

市村「・・・ど、どうも」

三橋「兄貴い・・・俺さ・・・もう疲れたよ・・・もう疲れたんだよ・・・」

斉藤「ふ、潔。何馬鹿なこといってるだよ俺はー・・・何やってんだ潔！」

銃を斉藤に向けて構えている三橋。

市村「え？・・・え？」

三橋「もう疲れてたんだよ。兄貴について行くのが・・・俺は・・・俺は・・・」

ゆっくりと三橋に近づく斉藤。

斉藤「潔、お前には俺は撃てない。だろ？お前は俺のことを愛してるんだ。

愛しい男を撃てるわけないよな？だろ？」

三橋「（発砲する）」

”バタン”その場で倒れる斉藤。

市村「えええ！」

三橋「あ、兄貴！（斉藤に覆い被さる）ごめんよ。ごめんよ兄貴！おれ、俺は嫌だったんだよ！

兄貴が俺以外の男に走るのが嫌なんだよ！

俺だけを俺だけの兄貴でいて欲しかったんだよ」

斉藤の胸に顔を埋めて泣く三橋

ふと、三橋の頭を撫でる手。

三橋が顔を上げると微笑みを浮かべる斉藤の顔

三橋「！あ、兄貴？兄貴！」

斉藤「（消え入りそうな声）騒ぐな。俺は眠いんだ」

三橋「兄貴！おれ・・・おれ・・・」

斉藤「随分とお前には迷惑かけたな・・・悪かったよ」

三橋「あ、兄貴い～」

斉藤「これで、もう俺はお前だけのものだ・・・（力尽きる）」

三橋「あ・・・あ・・・あ・・・兄貴iiiiii！」

斉藤の胸の上で泣いている三橋。

その後ろに見える忍び足で出て行く市村の姿。

君の微笑みが救いです。

---

○道路（夜）

服も化粧もボロボロの市村が泣きながら走ってる。

市村「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

○二人のアパート・外観（夜）

必死で走りながら階段を上って部屋のドアを開け中に入る市村。

○同・中（夜）

立ったままジッと一点を見つめている市村。

市村「（呼吸を整えている）・・・」

視線の先にはテレビの前で体育座りをしている千早。

千早もジッと市村を見つめている。

妙な沈黙

ゆっくりとタバコを差し出す市村。

市村「タバコ・・・買って来た」

千早「・・・ありがとう」

市村「・・・うん」

テレビを見だす千早

市村「・・・」

何もごとも無かったように台所に行き水を飲む市村。

千早の声「お風呂沸かしてるから」

市村「！・・・うん」

風呂場に向う市村、ふとリビングの千早を見る。

ジッと体育座りのままテレビを見ている千早。

市村「・・・あのさ」

千早「（テレビをみている）・・・」

市村「お風呂ありがとう」

千早「（テレビを見ている）・・・」

市村「あと・・・ごめんなさい」

風呂場へと去っていく市村

テレビを見る千早の表情が徐々に微笑みに変わる。

終わり